

「雨月物語」の用字

山口 紀子

はじめに

上田秋成は、都賀庭鎮・建部綾足らと並んで前期読本の代表的作家であり、秋成の「雨月物語」は前期読本の到達点的作品で、後の読本への影響も大きかった。「雨月物語」についての研究では、物語論が多くなされているのに対して、文体についての研究の歴史は浅く、中村幸彦氏、中村博保氏らによって文体論が形成されるに至ったのは一九六〇年代のことである。^{注1}しかしこれらの研究でも、秋成の用字に注目したものは少なく、用字をとりあげたものも用字の印象を述べるにとどまっているようである。^{注2}また、鈴木丹士郎氏などによる国語学的研究は、もともと文体研究を志向したものではないため、傍訓に着目した用字・用語の研究に徹している。

私は「雨月物語」において、傍訓が適切であるかどうか疑問に

思える漢字表記語^{注3}が多くあることに興味を持った。秋成が意図的にこうした表記をしているとすれば、なぜこのような表記をしたかを考えることによって、秋成の表現意識を探ることができないかと考えた。傍訓のついた漢字語のすべてを拾いあげて分類するという国語学的方法を使い、「雨月物語」の用字を考え、さらにそこから秋成の表現意識について考えてみようと思う。

一

「雨月物語」は傍訓のつけられた漢字語が多くみられる作品であり、最も傍訓のつけられている割合の少ない箇所さえ、一行（約二四文字）中に約二・五語の傍訓のつけられた漢字語が登場する。その語数（延べ数）は次のとおりである。（熟語はなるべく小さい単位にして数えた。例えば「観念修行」は「観念」「修行」の二語と数える。）

作品名	語数	丁数
白峯	六九二	八
菊花の約	六二〇	八
浅茅が宿	五五一	八・五
夢応の鯉魚	三三八	四・五
仏法僧	四四九	七
吉備津の釜	五四五	八・五
蛇性の姪	一一四八	一七・五
青頭巾	四二八	七
貧福論	五八二	七・五

右の表のように、まず、傍訓のつけられた漢字語のすべてを拾い出したわけであるが、次に傍訓が漢字語のよみを表わしているものとそうでないものとに分け、傍訓が漢字語のよみを表わしていないものについてさらに細かく考えていこうと思う。

傍訓が漢字語のよみを表わしているものには、固有名詞にふつてあるものと、一般語にふり漢字語のよみを助ける役割をしているものとの二つがある。おのおのの作品中の傍訓のついている固有名詞の数といくつかの例を次にあげる。

作品名	数	例
白峯	八〇	なるみ 鳴海・不尽・円位・体仁
菊花の約	三八	はせべ 丈部左門・孟子・佐用

浅茅が宿	五六	しろうさ 下総・葛飾・真間・雀部
夢応の鯉魚	一七	えんてう 延長・興義・長等・比良
仏法僧	四五	つしち 筑紫路・相可・拝志
吉備津の釜	二六	きび 吉備・賀夜・庭妹・井沢
蛇性の姪	六六	おほや 大宅・豊雄・飛鳥・那智
青頭巾	一三	くはひあん 快庵・龍泰寺・奥羽
貧福論	二八	ひつ 陸奥・蒲生・崑山・石崇

次に、傍訓が漢字語のよみを助ける役割をしているものを取り出すために、辞書を利用して傍訓の和語がよみとして辞書にのっているかどうかを調べてみる。ここで利用した辞書は『類聚名義抄』『色葉字類抄』『五本対照改編節用集』『文明本節用集』『書言字考節用集』『上田萬年 大字典』『日本国語大辞典』である。これにより漢字語のよみを表わすものが四三〇四例あり、固有名詞のよみを表わす三六九例をあわせて、傍訓のついた漢字語五三三例中四六七三例はよみを表わす傍訓を有している。傍訓と漢字語とにずれのあるものは六八〇例である。

この六八〇例の傍訓の性格が問題になる。そこでまず、傍訓のある漢字語について、『大漢和辞典』により漢字語の意味と出典を、『日本国語大辞典』により傍訓の和語の意味を、また注釈書を参

考として漢字語と傍訓が融合した場合の、秋成の意図したと考えられる意味（以後これを「文脈中での語の意味」と呼ぶ）を調べてみることにする。漢字語の意味、傍訓の和語の意味、文脈中での語の意味の間にはずれのある例が認められる。これら三つの意味にずれのある場合というのは、理論上次の四種類に分けられる。

- ①（漢字語の意味≡文脈中での語の意味）≠傍訓の和語の意味
漢字語の意味と文脈中での語の意味は一致しているが、傍訓の和語の意味とそれらの意味との間にはずれのある場合。

- ②漢字語の意味≠（文脈中での語の意味≡傍訓の和語の意味）
文脈中での語の意味と傍訓の和語の意味は一致しているが、漢字語の意味とそれらの意味との間にはずれのある場合。

- ③（漢字語の意味≡傍訓の和語の意味）≠文脈中での語の意味
漢字語の意味と傍訓の和語の意味は一致しているが、文脈中での語の意味とそれらの意味との間にはずれのある場合。

- ④漢字語の意味≠傍訓の和語の意味≠文脈中での語の意味
漢字語の意味、傍訓の和語の意味、文脈中での語の意味のそれぞれにずれのある場合。

（ここでの≡の記号は二つの意味が一致していること、≠の記号は一致していないことを表わすものとして用いている。）

結果的には③にあたる例はみられず、①が二八例、②が六五例、④が九例であり、三者が一致している場合が五七八例である。

二

そこで、①・②・④について例を示し考察してみようと思う。

- ①（漢字語の意味≡文脈中での語の意味）≠傍訓の和語の意味

◇舅姑

「吉備津の釜」に二例みられる。文脈は、

香央かきたの女子むすめ磯良いそらかしこに住いてより。夙ふとに起おき、おそく臥ふして。常に舅姑おやくの傍かたへを去さず。……（九六頁六行目）^{注7}

と、

磯良いそらこれを怨うらみて。或は舅姑おやくの忿いかりに托よせて諫め。……（九六頁一二行目）

である。「舅姑」について『大漢和辞典』には次のような出典がのせてある。

婦稱めかけ夫之父ちち曰い舅、稱めかけ夫之母はは曰い姑。〔爾雅、釋親〕

婦事めかけ舅姑、如ごと事ごと父母。〔禮記、内則〕

意味は「しゅうと、しゅうとめ」であり、文脈中での語の意味と

同じである。『日本国語大辞典』では「おや／＼」は「両親。二親。複数の人のそれぞれの親。祖先。」といった意味であり、傍訓を追っているだけでは、磯良の両親が正太郎の両親かはっきりしない。もちろん文脈の中に「磯良かしこに住てより」とあることから、この「おや／＼」が正太郎の両親であると考えられるのは当然であるが、「舅姑」という漢字語により、その内容は一層はつきりする。つまり「舅姑」という漢字語が、「おや／＼」という傍訓の内容を説明するという効果をあげているのである。

◇梟首^{かへ}

「白峯」にみられる例。文脈は、

終に家をすて、宇治山の坑に竄れしを。はた探し獲られて六条河原に梟首^{かへ}らる。……（一八頁七行目）

である。『大漢和辞典』によると、「梟首」は「古の極刑の名。首を斬って木の上に懸けてさらす、又その刑。獄門。さらしくび。簽首級。」という意味であり、文脈中での「首をさらす」の意味と同じである。出典は、

二十人皆梟首。〔史記、始皇帝〕

責以謀反、梟首雒陽。〔漢書、樂布傳〕

である。『日本国語大辞典』によると「かける」には「ある場所、ある物、人などにつけて事物や人をささえとめる。高い所につる

したり、とりつけたりする。掲げて人に見せる。さらす。」といった意味がある。傍訓をよむことによって、信西が六条河原にさらされたということがわかる。さらしの刑であるのでさらし首であろうと推測することができ、さらに「梟首」という漢字語をみることに、ほかならぬ信西の首がさらされたことがはっきりするのである。

◇陰風^{かげ}

「菊花の約」にみられる例。文脈は、

此ことわりを思ひ出て。みづから刃に伏。今夜陰風に乗てはる／＼来り菊花の約に赴。……（三五頁四行目）

である。『大漢和辞典』によると「陰風」は「陰気な風。殺伐な風。」という意味で、出典には次の例があがっている。

帝得聖相相日度、賊斫不死神扶持、縣相印作都統、陰風慘澹天王旗。〔李商隱、韓碑詩〕

『日本国語大辞典』をみると、「かぜ」は「大小にかかわらず、一般に地球上での空気の流れをいう。」意味の語である。何気ない「かぜ」という語に、「妖怪、亡霊などの出現に伴う陰気な風」の意味の「陰風」という字面を与えることにより、読者に赤穴宗右衛門の死を悟らせている。この「陰風」はすでに冥府の人となっている宗右衛門にとっては「かぜ」とあるという意味合がある

とも考えられる。前掲の「陰風」の例と同じ頁に、

左門慌忙と、めんとすれば。陰風に眼くらみて行方をしらず。

……（三五頁八行目）

のように「陰風」の例がある。「雨月物語」中で「陰風」という漢字語に傍訓がふつてある例はこの二つしかないので、使い分けがされていると断定することはできないが、「陰風」は文部左門の側からみた語である。松田修氏は「菊花の約」中の「約」という語をとりあげ、「約」が宗右衛門の行動にかかる場合には「ちかひ」、左門の行動にかかる場合には「ちぎり」と仮名がふつてあることを指摘し、宗右衛門の持つ「義愛」と左門のもつ「情愛」という愛の差異が、傍訓の差別に象徴されているのではないかと述べておられる。「陰風」の傍訓においては、愛の差異ではなく二人のおかれてある世界の違いにより使い分けているとは考えられないだろうか。つまり、冥府の人である宗右衛門にとってはただの「かぜ」であっても、現世にいる左門にとっては「いんふう」であるということだ。秋成が「菊花の約」において、宗右衛門と左門とを対照させて描こうとする意図を持っていたとすれば、「約」と「陰風」の傍訓は共通な意図による書き分けの例として考えられるものである。

◇烈婦

「浅茅が宿」に二例みられる。文脈は、

里人は所／＼に遁れ。弱き者どもは軍民に召るゝほどに桑田にはかに孤鬼の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひ給ふを守りて。家を出給はず。……（六〇頁一一行目）

今の物がたりを聞に。必烈婦の魂の来り給ひて。旧しき恨みを聞え給ふなるべし。……（六一頁八行目）

である。「烈婦」は文脈の中で、「貞節堅固で、それを守る性質の強く烈しい女性」の意味を持ち、すべて勝四郎の妻宮木を指す言葉である。『大漢和辞典』によると「烈婦」は「節操が堅固で気性のはげしい婦人。固く操を守る女。多く既婚の者にいう、烈女。」という意味の語で、出典には次の例があがっている。

殉_レ夫或遇_レ暴、不屈而死、曰_ニ烈婦_一。〔六部成語、禮部、烈

婦、注解〕

『日本国語大辞典』をみると、「さかしめ」は「さかしい女。かしい女。しっかりした女。」の意味を持つ語で、一般的には「賢女」の字があてられる。つまり、戦乱によってまわりの人々がいなくなっていく中で、ただ一人夫の帰りを待ち、家を守りとおすような「矢武さ」が、この「さかしめ」のみでは出てこないのである。「浅茅が宿」は『剪燈新話』の「愛卿伝」が原拠にあり、その中に愛卿に対する形容として「烈婦」の語が出ているので、「さか

しめ」より「烈婦」の語の方が秋成の頭の中にあつたのかもしれない。宮木が「朝に夕べにわすれ給はで、速く帰り給へ。」と勝四郎に言い、一人ひっそりと家を守っているのに対し、愛卿は操を守るために自ら命を絶つほどの激しさを持った女である。宮木が内面に秘めた強さを持っているのに対し、愛卿は強さが外面にも見える女性である。中国的女性理想像との違いもあるのだろうか、宮木は「矢武」であることさえ「老が物見たる中のあはれなりし」と思われる女性で、愛卿の姿とは離れた存在である。だからこそ、「烈婦」という字面を宮木にふさわしいようにやわらげる和語が必要だったのだろう。これにより、いかにもおとなしやかでありながら内面に強さを持った宮木にぴったりの「烈婦」の語が出てきたのであろう。

結論的に言えば、①は傍訓の和語の内容を漢字語が説明しているものであり、傍訓の和語のイメージを漢字語により、一層確かな方向の定まったものとしていえると言えるであろう。

②漢字語の意味(文脈中での語の意味)＝傍訓の和語の意味

◇慰あまなふ

「菊花の約」にみられる例。文脈は

播磨の国加古の駅に丈部左門といふ博士あり清貧をあまな慰あまなひて。

友とする書の外はすべて調度のあまな絮煩あまなをあまな慰あまなふ。……(二二頁)

一一行目

であり、文脈中では「甘んずる。甘受する。満足する。」の意味に使っている。『日本国語大辞典』を見ると、「あまなふ」には「甘んずる。満足する。」の意味があり、これは文脈中の意味と一致する。『大漢和辞典』によると、「慰」は「慰」の俗字で、「いこ。休む。休息する。」の意味を持つ字である。出典には次のものがある。

召伯所あまな慰。△伝▽慰、息也。〔詩經、召南、甘棠〕

丈部左門は情にあつく、しかも「口腹の為に人を累さんや」と言うように、貧しいながらも人に頼らず潔い生き方をしている男である。だからこそ「清貧に甘んじている」だけではなく、清貧であることを心地よいことであるかのように生きている。貧しさに妥協しているのではなく、ゆったりと構えている。そんな左門に「甘なふ」はふさわしくない。貧乏を楽しむ潔い雰囲気という言葉が必要だったのである。「慰」という字は物語後半に現われる左門の人柄の高さを感じさせる効果も持っている。

◇五旬いそじ

「青頭巾」にみられる例。文脈は、

年紀五旬にちかき老僧の。頭に紺染の巾をあまな帔あまなき。身に墨衣の

破たるを穿て。……(二五八頁一行目)

であり、文脈中では「五十歳」という意味で、『日本国語大辞典』にもある「いそじ」と意味が一致している。『大漢和辞典』をみると「旬」は「十年」という意味があり、出典も

且喜同年満七十。〔白居易、呈劉夢得詩〕

があるが、「五旬」となると仏教語として特殊な意味をもつものとなる。「五旬」とは「五神通」をいう語で、特別な修行者の持ち得る五種の超自然的な能力をいうものである。一般に「いそじ」には「五十」という字をあてる。「旬」に「十年」という意味があるのだから、「五旬」に「いそじ」をあてるのはおかしいことではないが、わざわざ「五旬」としたことから、「五旬」が仏教語であることを秋成が意識していたと考えられるだろう。快庵禪師は里人をおそう山寺の僧を教化するために山へ上るのだが、その夜禪師をおそおうとした僧には禪師が座っている姿がみえなかった。徳の高さからくる禪師の不思議な力である。五神通の中にはこのような力は含まれていないが、特別な修業者の持つ超自然的な力という点では「五旬」と共通する部分がある。秋成はこの不思議な力の伏線として、わざわざ仏教語である「五旬」に「いそじ」と傍訓をつけたのではないだろうか。

◇化かたち

「蛇性の姪」に一例、「貧福論」に二例みられる。文脈は、

你又畜が仮の化に魅はされて丈夫心なし。……（一四二頁一〇行目）

翁が思ふこゝろばえをもちたり和さまんとて。仮に化を見はし侍るが。……（一七五頁三行目）

霎時間せたまへ我今仮に化をあらはして話るといへども。神にあらず仏にあらず。……（一八一頁一〇行目）

で、文脈中での意味はいずれも「姿」という意味である。『大漢和辞典』をみると「化」は「ばける。なりかわる。」の意味を持つ字で、次のものが出典にあがっている。

変則化。△疏▽初漸謂之變、變時新旧両体俱有、變尽旧体而有新体、謂之為化、如三月令鳩化為鷹、是也、為鷹之時、非復鳩也。〔中庸〕

三つの「化」の例を考えてみると、「蛇性の姪」では大蛇が人間の女性にばけたもの、「貧福論」では黄金の精霊が小さい翁にばけたものに対して使っている。「かたち」とはいつでも人間以外のものが人間にばけてできた「かたち」なのである。そのもの本来の姿でないということは、「仮の」といった言葉にも表われている。「蛇性の姪」をみると、「容・容姿・姿・化」に「かたち」という傍訓がついているが、「容・容姿」は真女子の正体がわかる以前に使われているものであり、「姿」は人間の富子に対して使わ

れている語である。このことから、秋成は化けてつくった姿であることを意識して、「化^{かたち}」という表現を使っていることがわかる。

◇孔^{くれなる}

「蛇性の姪」にある例。文脈は、

三尺余りの口を開き。孔^{くれなる}の舌^{した}を吐^はて。只一呑^{のみ}に飲^いらん勢^{いきほ}ひをなす。……（一四八頁一行目）

で、文脈中の意味は「真赤な」といったものである。『日本国語大辞典』によると「くれなる」は「赤く鮮明な色」の意であるが、『大漢和辞典』では「孔」は「おおきい」の意味の漢字である。出典には、

孔徳之容。△河上公注▽孔、大也。〔老子、二十〕

がある。「孔」は「赤い」の意味とは全く関係のない漢字なのである。「孔の舌」は三尺（約一メートル）以上もある口から出されている。その大きさはどれほどであったろうか。おそらく人間を軽く一卷にできるほどであったに違いない。「孔^{くれなる}」の語は、表面上は大蛇の舌の赤さを形容したものだが、その大きさをも感じさせるものとなっている。

◇款^{もてな}す

「菊花の約」にある例。文脈は、

井臼^{せいきう}の力^{つとめ}はた款^{もてな}すに足^たざれども。己^{おの}が心なり。いやしみ給ふ

ことなかれ。……（三一頁一行目）

で、文脈では「饗応する。心をこめて接待する。」の意味である。

『日本国語大辞典』にも「もてなす」は「手厚く款待する。饗応する。ご馳走する。」の意味があり、文脈中の意味と一致している。『大漢和辞典』によると、「款」は「まこと。まごころ。」の意味を持ち、次のように出典があがっている。

款、誠也。〔広雅、釈詁〕

款、誠重也。〔一切経音義、四〕

この「款」の用字は「款待」の語を頭においてのことではないだろうか。「款待」は「手厚くもてなす」の意味を持つが、「もてなす」の意は「待」にあり、「款」のみではその意味は出ない。

そこで「待」の字のかわりに「もてなす」と傍訓をつけ、「款待」の意を表わしたのだろう。それでは「款」を一字で使ったことによる効果は何であろうか。「菊花の約」は人間の信義を描いた物語である。そのためか「菊花の約」では「まこと」という言葉を非常に多く使っている。用字は「実・信・情」など様々であるが、秋成が「菊花の約」において「まこと」を強調していると言えるであろう。文脈をあげた場面は、赤穴宗右衛門との再会に、左門が自ら調えた手料理をすすめているところである。自分との約束を守って戻ってきた宗右衛門に、自分も真心をみせ、宗右衛門の

信義に答えようというのが彼のもてなしである。だから、左門の粗末なもてなしは彼の真心、つまり「款」なのだ。「款待」とせずに「款」としたところには、「まこと」を強調している秋成の「菊花の約」での意図が大きくかわっているのではないだろうか。

②の例を通して考えてみると、①の場合のように漢字語が傍訓の和語の内容を説明していると言えるものもあるが、それ以上に漢字語が傍訓の和語の表わす意味に別のニュアンスを与える役割をしているのである。傍訓の和語は、物語を読む上で不可欠な意味を表わしており、漢字語のみでは意味が通らなくなるという点が、①との相違点である。

④漢字語の意味と傍訓の和語の意味と文脈中での語の意味

◇跪まる

「仏法僧」に二例、「蛇性の姪」に一例みられる。文脈は、

疾下りよといふに。あはたしく簀子をくだり土に俯して跪

まる。……(八四頁一行目)

我跪まりし背の方より。大なる法師の。面うちひらめきて……

……(八六頁一行目)

木伐老。米かつ男ら。恐れ惑ひて跪る。……(一二三頁二行

目)

で、文脈中ではいずれも「平伏する」の意味である。『日本国語大辞典』では「うすずまる」は「うずすまる」が正しく、「うすくまって集まる」の意となっている。『大漢和辞典』によると、「跪」は「ひざまづく。両膝を地につけ、腰と股をのばしている。又、その礼拝。礼容の一つ」とあり、出典には

跪、危也、両膝隠地、礼危陞也。〔釋名、釋容姿〕

がある。「跪まる」という表現は、漢字と傍訓の持つ意味を合わせ、「平伏する」といった意味となっている。つまり、「跪」の字からは「礼容の一つ」の意味を、「うすずまる」という和語からはうすくまって身を縮めている様子を表わす部分を取り、それぞれの意味から離れた意味を持つものとしたのである。

◇畜

「蛇性の姪」に四例ある。文脈は、

畜あなたが秀麗に姪けて你を纏ふ。……(一四二頁九行目)

你又畜が仮の化に魅はされて丈夫心なし。……(一四二頁一

〇行目)

此年月畜に魅はされしは己が心の正しからぬなりし。……

(一四三頁二行目)

畜をやすすかしよせて。これをもて頭に打敷け。……(一

五二頁一行目)

三

であり、「畜」はいずれも真女子を指している。文脈中では「あの畜生」の意である。『日本国語大辞典』によると、「かれ」は「話し手、相手以外の人をさし示す。」語で、他称である。「畜」は『大漢和辞典』によると「獸」と通ずる語で、「けもの。けだもの。」といった意味を持つ。これは、

畜、與獸通。〔正字通〕

からもわかる。「蛇性の姪」から真女子を指す語をほかに拾ってみると、真女子の正体が大蛇であるとわかる以前に「かの女」が二例、真女子に疑いを抱きはじめた豊雄の言葉の中に「かの鬼」が一例ある。真女子の正体がわかった後には「邪神」が三例、「隠神」が一例、「畜」が四例ある。つまり、正体のわかる前後で真女子に対する呼び方をはっきりと使い分けているのだ。「畜」という表現には、真女子の正体が人間でなく蛇であるという意味がこめられている。読者はこの「畜」という字をみることにより、当麻の酒人により暴露された真女子の正体を思い出すという仕掛けなのである。

④の例を通して考えてみると、漢字語の意味と全く違った意味を持つ傍訓をつけることによって、傍訓の和語の意味と漢字語の意味を合わせて、別の新しい意味をもった表現を作りあげていえるだろう。

ここでは前に述べた分類とは別に、興味をひかれる用字についてあげてみようと思う。

◇簾／＼

「浅茅が宿」にある例。中村幸彦氏をはじめ諸氏が注釈書で「簾」の字をあてて考えておられるが、影印本を見ると「簾」ともとれる。『大漢和辞典』をみると、「簾」は「簾のふえ。ひびき。こえ。」の意味を持ち、

拵ニ金鼓、吹ニ鳴簾。△注▽集解曰、簾簾也。〔史記、司馬

相如伝〕

の出典があるが、「簾簾」という例はない。一方、「簾」については「簾簾」の例があり、これは「がさがさいう音」の意味を持つ。『上田萬年 大字典』にも「簾簾」は「竹などの葉の相触れて発する音の形容」とある。出典には次のものがある。

山辺竹藤裏、簾簾地響。〔水滸伝、一回〕

「簾簾」が「竹などの発する音」を意味するのならば、

何物にや簾／＼と音するに目さめぬ。……（五七頁二行目）

の文脈にもあてはまる。当時の学者たちが非常によく研究した「水滸伝」に「簾簾」の用例があることから、「簾」の字であ

ると考えた方がよいのではないかと思う。

◇ 呆自^{あきれ}

「浅茅が宿」にある例。文脈は、

呆自^{あきれ}て足の踏所^{あみど}さへ失^{わす}れたるやうなりしが。……（五七頁九

行目）

で、文脈中での意味は「茫然として」といったものだが、『大漢和辞典』には「呆自」という漢字語はない。では「呆目」とはどこから出た語であろうか。「あきる」は現代語と違い、古語では軽蔑の意を持たず、「意外なことにあってどうしてよいかわからなくなる。途方にくれる。あつけにとられる。」の意味の語で、「茫然自失」と同じ意味を持っている。この「茫然自失」から出たと考えるのはどうだろうか。『大漢和辞典』にはないが、『日本国語大辞典』『上田萬年 大字典』には「茫然」の同意語として「呆然」がある。これにより、「茫然自失」は「呆然自失」とも表わせると言える。つまり「呆然自失」の状態にあることが「あきる」なのであるが、この四字熟語に「あきる」と仮名をふるのは語の長さを考えてもアンバランスであるし、「呆然」でも「自失」でも文脈において言葉足らずとなる。そこで秋成は「呆自」という字面を選んだのだろう。「呆自」は「呆然自失」を抱括している面を持った漢字語と言えるであろう。

◇ 俎盤^{まないた}

「夢応の鯉魚」にある例、文脈は、

右手^{みぎり}に礪^{とぎ}すませし刀^{かたな}をとりて俎盤^{まないた}にのぼし既に切べかりしとき。……（七二頁五行目）

である。「まないた」は料理をするのに用いる板のことで、一般には「俎・俎板・真魚板」と表わすが、「俎盤」は『大漢和辞典』にもない。なぜ「俎板」とせず「俎盤」としたのだろうか。『日本国語大辞典』の「まないた」の説明の中に「切盤^{きりばん}」という語が出てくる。意味は「食物などを包丁で切るときに用いる板」であるが、『大漢和辞典』にはない語であるので、日本特有のものであるかもしれない。『日本国語大辞典』には

まぎろしや、切盤手水新世帯〔雑俳、俳諧絹はかま〕

や、浄瑠璃の「軀山姥」の例があがっており、一般的に使われていた語のようである。秋成はこの「切盤」を頭において、「板」よりも頑丈な感のある「盤」の字を用いたのだろう。その意味で、「俎板」と「切盤」の二つの語から「俎盤」が考え出されたと言えるであろう。

◇ 蹠蹠^{あひさま}

「貧福論」にある例。文脈は、

夙^{もと}に起おそくふして性力^{ちから}を凝^{こら}し。西にひかしに走りまどふ蹠蹠^{あひ}

蹊さきさらに閑いとまなく。……（一七九頁九行目）

である。『日本国語大辞典』によると、「ありさま」は「外から見ることできる物事の状態。様子。」の意味の語であるが、『大漢和辞典』をみると「蹊蹊」は「常理に違つて疑わしい。あやしい。奇怪な。」の意味を持ち、出典が次のようにあがっている。

這人從來不ニ和レ我喫酒、今日這杯酒、必有ニ蹊蹊一。〔水滸伝、二四回〕

また『唐話類纂』に「キミヤウナルコトヲ云」、「俗語釈義」に「コミイリタルコト」の記述があり、「蹊蹊」という漢字語の「普通でない」といったイメージがわが国でもかなり浸透していたと考えられる。「雨月物語」にはこの「蹊蹊」のように、中国白話小説で使っている語に別の意味を持つ和語を傍訓としてつけている例がいくつかある。用字においては、中国白話小説に大きな影響を受けているが、それにしぼられて型にはまった表現をするのではなく、語の持つ意味を広げようとする試みをしている。ここに秋成の「自分の今の思念感情を表現する、一番適当な言葉を選択すればよい。」^{注9}という姿勢があらわれている。

その他、誤刻と考えるものもいくつかみられるが、既に注釈書でとりあげていることなので、ここでは省略することにする。

結 び

「雨月物語」は、傍訓の和語を拾って読んでいくだけでも意味の通ずるものである。もちろん、それだけでは秋成が細かく考えている語に持たせた意味や効果はわからないが、読んで文脈を理解するには不自由しないという意味である。もし、傍訓が漢字語のもつ意味と同義であるという原則に基いていれば、これは当然のことである。しかし「雨月物語」がこの原則に反していることは、これまで用例でみてきたとおりである。傍訓の和語を追うことで意味が通ずるということは、言いかえれば秋成が漢字語を選ぶことにおいて表現の冒険をしているということである。「表現の冒険」とは、漢字語の意味と傍訓の和語の意味をずらして、言おうとするところを二倍にも三倍にも広げる用字法のことである。漢字語と傍訓は同義であるという原則を破った用字法であるので「冒険」とした。傍訓の和語は、文脈によってある程度固定するから、原拠から漢字語をとっている場合を除いては、傍訓の和語に漢字語をあてた用字法と言えよう。その意味で「ふり漢字」^{注10}的用字法とも言える。鈴木丹士郎氏の述べておられる「同一の傍訓がいくつかの漢字語に用いられている場合」^{注11}というのは、日本語のもつ意味の広さや曖昧さと、漢字の歴史の古さに起因する一つ

の漢字の持つ意味の細かさが、「ふり漢字」的用字法により組み合わされたことによるものであろう。つまり、細かいニュアンスを言い分ける漢字が一つ一つ存在するために、意味に幅のある一つの和語に、多くの漢字語があてはめられるのである。秋成の用字法について、用例をあげ、その表現効果を考えてきたわけだが、秋成の表現の意図は、漢字語により傍訓の意味を説明することと、漢字語により傍訓の持つ意味以外のニュアンスを加えることとの二つと言えるであろう。また、秋成の用字は、漢字語によりその言おうとするところを広げるものであるために、非常に視覚的なものとなっている。漢字語が意味を二倍三倍にさせる重要な鍵となっているため、的確に秋成の意図をよみとるには、傍訓によって読み流すのではなく、漢字語の意味を読みとることが必要である。

言いかえると、秋成の文章は音読を耳にするだけではわかり得ない表現効果を持ったものであるので、視覚的な用字なのである。また、中国白話小説を熟読している者にとっては、「蹣蹣^{ありさま}」のように傍訓が漢字語にそぐわないものがあることがわかるであろう。このことは、秋成が中国白話小説の影響をうけながらもそれにこだわらず、それらの語彙を「ふり漢字」的に用いていることによっている。この視覚的「ふり漢字」的用字法にこそ、秋成の表現意識の真髓があると言えよう。

なお付言すれば、「雨月物語」は古典の影響の強い作品でもあり、秋成自身も従来の万葉研究を結集した「金砂」及び「金砂刺言」や「伊勢物語古意」などを著わしている^{注12}。今回は「金砂」をはじめとする国学者としての秋成の著作を参考にすることができなかったが、表現意識を掘り下げて研究するためには、さらに広く秋成の著作をみていくことが必要であろう。

注

- 注1 中村幸彦「秋成の文体」(『国文学』昭和35・10)・中村博保「上田秋成の思想と文体」(『日本文学』昭和37・3、8)など
- 注2 鈴木丹士郎「読本における漢字語の傍訓」(『近代語研究』近代語学会編 武蔵野書院 昭和43)
- 注3 以下、注2の「読本における漢字語の傍訓」中で、鈴木氏が「漢字語というのは、概念をとまった語としての漢語と訓に対する表記としての漢字の両方を含む意味で用いる。」としているのに従い、「漢字語」と略す。
- 注4 広範囲な時代にわたった様々の用例を公平にみるためにこれらの辞書を参考とした。
- 注5 紙数の都合上全部の例をあげることにはできないので、簡単にいくつかの例を附表にまとめた。
- 注6 中村幸彦『上田秋成集』(日本古典文学大系 岩波書店 昭和34) 鶴月洋『雨月物語評釈』(日本古典評釈全注釈叢書 角川書店 昭和44)を主として参考にした。
- 注7 以後、頁数行数は『雨月物語』(勉誠社文庫5 勉誠社 昭和51)

による。

注8 「秋成・詩の実験者として」〔『現代詩手帳』思潮社 昭和47・10〕

注9 中村幸彦「上田秋成の文体」〔『国文学』学燈社 昭和35・10〕

注10 注8に同じ。

注11 注2に同じ。

注12 『上田秋成集』（日本古典文学大系 岩波書店 昭和34）解説

本論文の底本には、安永五年（一七七六）刊行、京都梅村判兵衛・大坂野村長兵衛の初版本（国立国会図書館蔵）の影印本である、『雨月物語』勉誠社文庫5（勉誠社 昭和51）を使った。本文の引用も、この影印本による。

〈附表〉

紙数の関係で各辞書に固有にみられる訓のみを記す。

名詞	動詞	形容詞	形容動詞	副詞
明・閑・極 械・瓏・地 産・日・他 夕など	結・亡・販 顧・賀・帔 く・喫・要 むなど		徐に	
色葉字類抄 泉郎・饗・何 蛇・海若な ど	躁・逗・ま る・戴・成 長など			

書言字考節用集	文明本節用集	五本対照改編節用集
旦・訛・戸 渠・旅客・盟 力・平生・時 など	患・裔・士 など	鰥・晨・坑 渥・師・寿 宅・背・陰 天・樹神・土 産・節・賊 など
涸・見はす 禁しむ・諷 ふ・転す・易 告すなど	生す・怕る 吝む・閉・列 ふ・寒る・逐 ふなど	没る・察ら む・湊む・肯 がふ・落魄 話る・困む 踰る・順ふ など
凶・鬱 恒・清し 旧しなど	罷事なし など	清よし 陋・賤し 劇しなど
杏に	種々にな ど	鳴呼・熾 に・暴に 苦になど
呵く・ 頃刻・微 しなど		讒に・連 りに・近 来・夙に 蚤く・従 来・終夜 など

（昭五八 日文学）